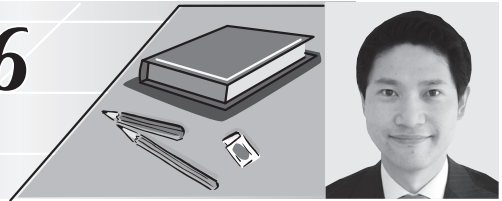


# 学生時代と図書館 106

## 「大学の修行僧」

宮口貴彰



お恥ずかしながら、図書館から本を借りる、ということをおぼろしく覚えていたが、読書は小さい頃から好きだった。母親の方針で小さい頃から活字の本であればいくらでも買っていてと言ってくれていたのも、大好きな読書とサッカーのみをひたすらするという幼年期を過ごした。そんな私であったが、高校を卒業した18歳より留学をしたアメリカ、イギリス、ドイツの三ヶ国に住んでいた合計6年間のうち2年間分程は図書館で過ごしたのではないかと誇張でもなく感じる。

高校卒業後に語学留学をしたカリフォルニア大学バークレー校の英語学校では（同校の学生証をもらえたために）、その当時一番遅くまで開館していた、天井が高く目が醒めるような白色が特徴であるDoe LibraryのNorth Reading Roomに朝から夜の閉館時間まで、週末は10時間ほど、授業のある平日は6時間ほど、ひたすらアメリカの正規留学に必要なTOEFL、SAT、SATIIの勉強に明け暮れていた。その後晴れて入学したミシガン大学アナーバー校ではキャンパスの真ん中の広い広場が一望できるHatcher Graduate Libraryにて、ここでも昼夜を問わず、授業以外の時間のほぼ全てを勉強に費やした。およそ1日平均6—7時間は図書館で過ごすような留学生活であった。当時ミシガン大学ではNaked Mileと呼ばれる最後の学期の最終授業日を祝う、全裸になってのグリラ的なマラソンイベントが大々的に行われており、何回かは当日、図書館から直接ヘッドハントされそうになったが、なんとか切り抜けていたことが懐かしい。中学高校と、根っからの文系人間が気がつけば環境学の理学専攻へと理転していたこともあり、学部時代はただただ要求されている勉強の量、競争の日々を1日また1日と必死に食らいついて生き残ろうとしていた日々だった。同校の勉強の厳しさの度が過ぎており、無水カフェインの

錠剤、（カフェインの量がコーラに比べて約2倍の）マウンテンデューなどの刺激物を大量に胃の中に流し込みながら各クラス指定の、一冊2kg程ある教科書の1頁1頁と格闘していた。

この時の図書館における勉強時間を通して、天井が高く、格調高い図書館を大好きになっていった。図書館好きが講じて、学部時代の交換留学先をオックスフォード大学に決めたのも、同校の持つハリーポッターの舞台にもなったOld Bodleian Library、そしてRadcliffe Cameraでぜひ籠って勉強をしてみたい、というミーハーな気持ちが強かった。イギリス留学中も、アイルランドのTrinity Collegeの図書館を見たい、という理由のみでダブリンに旅行に行き、同じようにスイスのザンクト・ガレンにもAbbey Library of Saint Gallのみを見るために訪ねた。息をのむ美しさ、ずっとそこに居たいと感じさせてくる空間であった。

大学院時代はシカゴ大学の図書館の中でも一番作りが重厚なHarper Libraryにて今までと同様に毎日、勉強に明け暮れていた。感覚的には日本のそれよりも2倍は長く感じるサブウェイのフットロングサイズのサンドイッチを、寮での朝食後購入しバックパックに忍び込ませ、昼食として半分、晩御飯として残りの半分を食し、図書館から一歩も出ることなく夜まで勉強に費やしていた。とはいえ学部時代の想像を絶するスパルタ教育から無事生き残った修行僧としては、大学院の勉強はまだ余裕があり、その分国際機関への就職活動に集中することができた。しかし大学院の時代も、勉強が厳しすぎることからくる学生の自殺事件で図書館に警察が大学したことも鮮明に覚えている。文字通り命がけの勉強である。図書館とともに私の学生時代はある。

みやぐち たかあき（准教授・地球環境学）